

在日総合誌 抗路

2022.12 第10号

亡くなられた姜在彦さんが在日社会の「構造的変化」について語ったのは、いまから半世紀近くも前のことだった(『季刊三千里』八号、一九七六年)。この頃には日本生まれの二世が75%を超えて日本での「定住」を踏まえた権益擁護運動の流れが台頭していた。

戦後の在日の運動は、いつも、定住者としての「住民の論理」と「民族の論理」の間で揺れ動いてきた。しかし、朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)への帰国運動が高まった頃からは「統一すれば在日の問題も解決する」という「帰国の思想」がまかり通った。

そういう熱気も冷めて在日朝鮮人があらためて足元の現実に向き合い始めたのが七〇年代だった。その後の八〇年代を挟む十数年は、新しい「見取図」をめぐる論争の時代だった。『三千里』『マダン』『ちゃんそり』『民涛』『ほるもん文化』といった実に多様な在日のメディアがこの論争の舞台となった。

いま私たちが在日朝鮮人は、あらためて「構造的変化」のときを迎えているのかもしれない。二〇二一年末現在、韓国・朝鮮籍の朝鮮人は四〇万人ほどに減り、そのうちの「特別永住者」は三〇万人を初めて下回った。累積の日本国籍取得は四〇万人に達しようとしている。在日の婚姻の九割は日本人とのそれである。

もちろん「帰化」の増大は、同化や風化が同じ程度ですすんでいることを意味するわけではない。むしろ三世以下の世代で「本国回帰」や「先祖帰り」の傾向も目立っている。暮らしの拠点を韓国に求めたり、二重国籍を維持する若い世代も少なくない。「越境する「在日」(本誌七号)が一つのトレンドとして定着しているのである。

七年前、『抗路』はその特集を「在日」の現住所」と銘打って出発し、節目となる今号は「在日」の見取図」とした。とはいえ、もはや、在日のいまを一つの「見取図」に収めることなど望むべくもない。今号につづられた多様な語りや思いからどんな「見取図」や「未来」を描くことが出来るのか、一人ひとりの読者の皆さんに委ねさせていただきたい。